

## 武器と芸能 その二 流鏑馬を中心に

著者	中村 茂子
雑誌名	芸能の科学
号	23
ページ	145-164
発行年	1995-03-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1440/00003035/">http://id.nii.ac.jp/1440/00003035/</a>



武器と芸能〈その二〉

——流鏑馬を中心に——

中村茂子

はじめに

一 『記紀』に見る弓矢の諸相

二 鳴鏑・鳴弦の呪力

三 祭礼行事に見る流鏑馬

1 中央寺社における発生と展開

2 埼玉県毛呂山町出雲伊波比神社の流鏑馬

四 狂言「児流鏑馬」の台本に見る祭祀組織と流鏑馬  
おわりに

## はじめに

『古事記』『日本書紀』（以後『記紀』と記す）に記された武器を、「刀剣の類」「弓矢の類」「ほこ・楯・杖・その他」に分類し、それぞれの諸相について奈良時代以後に発生、定着、伝播、変容した行事や芸能に用いられる武器の機能と変遷についての研究を進めている。「その一」では「ほこ」を取り上げ、採り物および祭礼の山車としての「ほこ」の形式的変容、機能的変遷について考察した。<sup>(1)</sup>

本論では「その二」として弓矢をとりあげ、主として祭礼の中に位置づけられた流鏑馬の意義について考察してみた。初めに『記紀』に見られる弓矢の諸相のうち、後世の流鏑馬を導き出す行為についての記事をあげ、次に院政期において祭礼の中に位置づけられた流鏑馬が、武家社会の到来とともに中央大社の祭礼にとって不可欠の儀礼となり、室町時代に衰退した過程をたどる。最後に中世末期から近世にかけて、庶民の祭礼の中に取り入れられた流鏑馬が、どのような形式、および機能を持っていたか、現行の流鏑馬を中心とした祭礼と比較しながら考察する。

## 一 『記紀』に見る弓矢の諸相

弓矢が、古墳時代から狩猟および戦闘の武器として盛んに使用されていたことは、鉄鏃の大量出土によって推測することができる。『記紀』に記された弓矢に関わる記事は、件数の上で「刀剣の類」に次いで二番目に多い。『記紀』<sup>(2)</sup>それぞれの最初に記されている弓矢の記事は、いずれも天照大神の武装姿を記したもので、『記』では、「曾毘良邇は千人の鞆を負ひ比良邇は五百人の鞆を附け、亦伊都の竹鞆を取り佩ばして、弓腹振り立てて」と記されている。また、『紀』

では「又背に千箭の鞆と五百箭の鞆とを負ひ、臂には稜威の高鞆を著き、弓弭振り起て」と記されており、両者とも高天原へ追われて来た素戔鳴神に対して、天照大神が詰問した時の姿を描写したものである。

『紀』の記事について、室町時代の武家故実家小笠原持長（一三九六—一四六二）著『大体的拝記』の「鳴弦墓目考」<sup>(4)</sup>には、次のように記されている。「鞆をつくるは鳴弦のためなれば、鳴弦は神代より起るといふべしと。また、『紀』の巻第一四雄略天皇二三年八月の条と、巻第二三舒明天皇九年三月の条には、それぞれ「彈弓弦」「弦を鳴さしむ」という鳴弦を行った具体的な表現が見られる。したがって、奈良時代には何らかの目的で鳴弦が行われていたことは明らかである。

次に、『記紀』に記された弓矢の諸相と、それぞれの特色を総体的に理解しておきたい。第1表および第2表は、『記紀』に記された弓矢に関わる記述を網羅的に抽出し、分類して各項目の件数と割合を示したものである。第1表に示した『記』の二三件を八項目に、また第2表に示した『紀』の六〇件を二項目に分類した。その結果、『記紀』に記されている弓矢の特色を次のように把握することができる。

『記紀』の共通項目は、「武装・戦闘に用いる」「神・人・動物をいころす」「献上・下賜する」「歌に詠む」の四項目であり、両者とも第1項にあげた「武装・戦闘に用いる」が最も高い数値を示している。

初めに第1表の特色について見ると、二番目に高い数値を示しているのは、第6項「神・人・動物をいころす」であり、八項目中この二項目だけが突出して高い数値である。残り六項目は、二〜一件という低い数値を示している。そして、高い数値の二項目だけが武器として用いられ、低い数値の六項目は呪術的な機能であることを示している。第1表において、六項目中の二項目は鳴鏑であることを明示したが、武器として用いる「神・人・動物をいころす」の中にも、鳴鏑を用いている場合が一件含まれている。

次に第2表の特色を見ておこう。二二項目中の第1項「武装・戦闘に用いる」だけが高い数値を示し、以下第3項

第1表 『古事記』に見る弓矢の諸相

『古事記 祝詞』（『日本古典文学大系』1 岩波書店）

	項 目	件 数	割 合
①	武装・戦闘に用いる	7	30%
2	鳴鏑を射る	2	9%
3	政治的支配の象徴	1	4%
4	神の象徴（鳴鏑）	1	4%
⑤	献上・下賜する	2	9%
⑥	神・人・動物をいころす	6	26%
7	弓矢に化けて女に出会う	2	9%
⑧	歌に詠む	2	9%
	合 計	23	100%

○番号は『日本書紀』との共通項目であることを示す

「献上・下賜する」が七件、第4項「狩獵に用いる」と第19項「射を見る」が各五件、第2項「神・人・動物をいころす」・第5項「負傷する・死ぬ」・第10項「歌に詠む」が各三件で、残り一四項目は各一〜一件となっている。この一四項目中には、第18項「税として納める」・第12項「外国に乞われる」・第20項「家に置くのを禁ずる」などが見られ、『記』に比較して武器としての機能が大きく広がっている。さらに、第6項「予兆を現わす」・第11項「鳴弦して戦勝に導く」など、『記』には見られない呪術的な内容の拡大も示されている。

第1表・第2表にあげた二五項目（○印は共通項目）中、後世の祭祀行事に位置づけられた流鏑馬との関連を推定できる項目には、次のようなものがある。第1表の第2項「鳴鏑を射る」・第4項「神の象徴（鳴鏑）」・第2表の第19項「射を見る」・第11項「鳴弦して戦勝に導く」の四項目である。

次に、その内容を具体的に示すことで、流鏑馬が祭祀行事に位置づけられるべき必然性について、その手がかりを得たい。

第1表の第2項「鳴鏑を射る」は二件で、一件目は大国主神が根国を訪問した時に、根の国の主である素戔鳴神がとった行為の一つについて、次のように記されている。「亦鳴鏑を大野の中に射入れて、其の矢を採らしめたまひき。（中略）爾に其の鼠、其の鳴鏑を咩ひ持ちて、出で来て奉りき」<sup>(7)</sup>。二件目は、神武天皇が東征に向かうのに際して、八咫鳥を遣わして兄宇迦斯、弟宇迦斯の兄弟を天皇に服従させようとした。兄宇迦斯の抵抗の暗示を次のような記事で

第2表 『日本書紀』に見る弓矢の諸相

『日本書紀』（『日本古典文学大系』67・68 岩波書店）

	項 目	件 数	割 合
①	武装・戦闘に用いる	13	22%
②	神・人・動物をいころす	3	5%
③	献上・下賜する	7	12%
4	狩猟に用いる	5	8%
5	負傷する・死ぬ	3	5%
6	予兆を現す	1	2%
7	弦を切って戦えなくする	2	3%
8	弓矢の名手	2	3%
9	弦・矢を髪に隠す	2	3%
⑩	歌に詠む	3	5%
11	鳴弦して戦勝に導く	2	3%
12	外国に乞われる	1	2%
13	計りごとの目印にする	1	2%
14	ことわざになる	1	2%
15	貢ぎ物にする	2	3%
16	武器を蓄える	2	3%
17	捨てて停戦する	1	2%
18	税として納める	2	3%
19	射を見る	5	8%
20	家に置くのを禁ずる	1	2%
21	家に置かせる	1	2%
	合 計	60	100%

○番号は『古事記』との共通項目であることを示す

示している。「是に兄宇迦斯、鳴鏑を以ちて其の使を待ち射返しき。故、其の鳴鏑の落ちし地を、訶夫羅前と謂う<sup>8)</sup>。両者とも天皇の使者である動物が、放たれた鏑矢の真の意味を事前にキャッチし、天皇の窮地を回避する役割を果たしている。第1表の第4項「神の象徴（鳴鏑）」は一件で、大年神の神裔（素戔鳴神の神裔に直結）に連なる一柱、大山咋神についての記事で次のように記されている。「次に大山咋神、亦の名は山末之大主神。此の神は近淡海国の日枝の山

に坐し、亦葛野の松尾に坐して、鳴鏑を用つ神ぞ<sup>(9)</sup>。鳴鏑は山を支配する山の神が常に用いる物で、この場合も動物との関係を暗示的に捉えることができる。したがって、この二項目三件に示された鳴鏑の機能は、いずれも動物との関係を通して神意を表現することであり、鳴鏑の発する音響が大きな役割を果している。

次に第2表の第19項「射を見る」は五件で、それぞれ『紀』巻第二五の孝徳天皇三年正月一五日の条に記された「朝廷に射す」。巻第二九の天武天皇五年正月一六日の条に記された「禄を置きて西の門の庭に射ふ。的に中るひとは、禄給ふこと差有り」。同三年正月二三日の条に記された「天皇、東庭に御す。群卿侍へり。時に、能く射ふ人及び侏儒・左右舍人等を召して射はしむ」。巻第三〇の持統天皇三年七月一五日の条に記された「左右京職及び諸国司に詔して、射習ふ所を築かしむ」と、同三年八月二三日の条に記された「射を觀たまふ」<sup>(10)</sup>である。

「朝廷に射す」は、資料の注記に「年中行事の射礼か。清寧四年九月条に見える。本条は正月これを行う記事のはじめ。令に『凡大射者、正月中旬、親王以下初位以上皆射之』(雜令 大射条)」と記されている。また、『続日本紀』<sup>(11)</sup>慶雲三年(七〇六)正月の条には、大射の禄法について次のように記されている。「定大射禄法。親王二品。諸王臣二位。一箭中外院布廿端。中院廿五端。内院卅端。三品四品三位。一箭中外院布十五端。中院廿端。内院廿五端(以下略)」。

右の記事は、奈良時代の後期に天皇の前で弓技を見せることが、宮廷の年中行事として確立していたばかりでなく、そのための練習を諸国で行っていたことを示している。

弓技には、歩射と騎射の二種があつて、射礼・賭弓・弓場始などには歩射を、流鏑馬・笠懸・犬追物などには騎射を用いた。実際の内容とはともかく、『記紀』にはまだ射礼や流鏑馬についての具体的な記事を見ることはできない。しかし第2表の第19項「射を見る」に分類した五件はいずれも歩射であり、また第4項「狩獵に用いる」に分類した五件中の一件は騎射の例で、皇極天皇元年五月五日の条に「射獵を觀しむ」<sup>(12)</sup>と記されている。この場合鳴鏑が用いられていたか否かは不明であるが、『記』に示された鳴鏑の例を考え併せたとき、鳴鏑であった可能性は大きい。



第2表の第11項「鳴弦して戦勝に導く」の二件は、次のような記事をあげることができる。雄略天皇三年八月の条「尾代、空しく弾弓弦す。海浜の上にして、踊り伏しし者二隊を射殺す」<sup>(13)</sup>。舒明天皇九年三月の条「而して親ら夫の剣を佩き、十の弓を張りて、女人数十に令して弦を鳴さしむ。(中略)蝦夷を撃ちて大きに敗りて、悉に虜にす」<sup>(14)</sup>。両者とも鳴弦することで、負け戦を戦勝へと導いた例であり、その機能は、『記』に記された鳴鏑を射ることで神意を表現する行為に連なるものである。何故なら鳴弦することで神の後裔である天皇の意志を相手に伝え、その結果としての戦勝である。

以上、右にあげた第1表(第2・4項目)と第2表(第19・11項目)の四項目の内容は、射礼や流鏑馬成立の萌芽的な行動として捉えることができる。

## 二 鳴鏑・鳴弦の呪力

平安時代末期の鳴弦の記録として、『権記』寛弘五年(一〇〇八)九月一三日の条に次のように記されている。「夕方御湯殿、致時朝臣読書、弦打二十人、五位十人、六位十人」<sup>(15)</sup>。また、『山槐記』治承四年(一一八〇)二月二一日の条には、「賜藏人所、殿上弓(御湯殿料也、受禪之後可召灌口弓也)同給之」<sup>(16)</sup>。この記事について伊勢貞丈(一一七一〜一七八四)著『武器考証』<sup>(17)</sup>には、次のように記されている。「御湯殿料トハ、天子御湯殿ニ入セ玉ヒ、湯浴シタマフトキニ、藏人弓ヲ取テ鳴弦スル也。其トキニ用ル弓ト云事ナリ」。その他、雷避けや物の化退散<sup>(18)</sup>などにも鳴弦が行われ、同様の効果を期待して、墓目(鏑矢の一種)を射ることが行われていた。<sup>(20)</sup>

平安時代末期に行われていたこれらの呪術は、鳴弦や鳴鏑の発する音響によって、人間に害を与える悪霊や疫神などを退散させる目的で行われたもので、奈良時代の鳴鏑による動物を仲介した神意の表現とは内容的に変化している。こ

の変化は、神であった天皇から人間的な天皇への意識の変化であり、時代的な変遷として捉えることができる。

鎌倉時代の『北野天神縁起』第八巻「六道の中、人間界における出生」の場面について、宮次男氏は次のように記しておられる。<sup>(21)</sup>「屋内の中央、（中略）若い女性は産婦である。隣室の頭巾袈裟をつけた男は祈禱師であろうか、廊下では弓の弦をかきならして悪い怨霊の近づくのを防ぎ、庭では祭壇をもうけて祭文を読みあげ、共に安産を祈っている」。この記事から、鎌倉時代以後には貴族や武家の間でも出産に際して、鳴弦を行うことで悪霊を近づけない呪術としていたことがわかる。

また、流鏑馬が平安時代末期から中央の祭礼行事に位置づけられ、武士社会において政治的権威を示す手段として利用されたのは、鳴鏑を用いて神意を問う行為に大きな意義を認めていたからであろう。次に流鏑馬の変遷と、地方の祭礼に見る流鏑馬を具体的に記してみよう。

### 三 祭礼行事に見る流鏑馬

#### 1 中央寺社における発生と展開

流鏑馬史料の初見として知られているのが、『中右記』永長元年（一〇九六）四月と五月の記事である。<sup>(22)</sup>前者は、四月二十九日の条に記された「上皇於鳥羽殿馬場御覧流鏑馬」であり、後者は五月二日の条に記された「大納言殿参高陽院給、今日御覧流鏑馬、武者十二人、（略）今日又上皇、於鳥羽殿、仰武者所等有流鏑馬興云々」である。<sup>(23)</sup>この史料に見られる流鏑馬は、貴族の遊興として行われている。

鶴田泉氏は、流鏑馬が貴族の遊興から祭礼行事の中核に位置づけられて行く過程について、「鳥羽城南寺祭・新日吉小五月会・宇治離宮祭」<sup>(24)</sup>に見られる流鏑馬史料を検討し、次のように論じておられる。

院政期に初めて記録に現われた流鏑馬は、院の主催する城南寺祭に取り入れられ、行事として成立した。それは朝廷の騎射の伝統を継承するとともに、在地においては射芸、または神事として発達してきたものを取入れて再編、整備したものである。その意義は、流鏑馬を北面衆に勤仕させることで院の側近勢力結集と、在地との結合を強めることにあった。鳥羽院から後白河院への権力の移動に伴って城南寺祭が衰微すると、代わって新日吉小五月会において継承した。この行事形態は、鎌倉幕府の流鏑馬行事創設に際しても参考にされた。この鵜田論によって、祭礼に奉納される流鏑馬が、武家社会の確立に大きな役割を果たしたのを知ることができる。

右にあげた鵜田氏論の中心は在地の人々によって行われ、神事としても発達しつつあった流鏑馬を、院が中央の祭礼の中核に位置づけたという点である。福原氏は、春日若宮祭礼の流鏑馬を例に、祭礼創始の保延二年（一一三六）から流鏑馬が行われており、大和国中住人による在地武士の流鏑馬を取り入れている事実は、鵜田氏論の通りであると記しておられる<sup>(25)</sup>。

鵜田氏はさらに、源頼朝が文治三年（一一八七）に始めた鎌倉鶴岡八幡宮の放生会は、流鏑馬を中核とした鎌倉幕府の公式行事であったとし、その成立・定着・変容・衰退について次のように論じておられる<sup>(26)</sup>。

頼朝は鶴岡八幡宮の放生会を発足させるのに際して、京都石清水八幡宮放生会の国家的行事としての機能と、城南寺祭・新日吉小五月会の軍事力結集の機能を合体させた新しい行事の確立を目指した。鶴岡八幡宮放生会の中核に取り入れられた流鏑馬は、頼朝にとって御家人の集結を計る手段であった。御家人側は、それぞれ在地の一の宮などで奉納してきた独自の射芸を鎌倉八幡宮の神前（頼朝）に披露し、力を誇示する場とした。鶴岡八幡宮の放生会は、実朝の時代である承元年間（一二〇七～一一）以降、さらに華やかで盛大に行われるようになったが、承久の乱（一二二一）以後、大きく変容することを余儀なくされた。鎌倉幕府の権限が全国的な規模になり、藤原氏から將軍を擁した執権北条氏は、鶴岡八幡宮の放生会もそれにふさわしい京風の行事にする必要にせまられた。北条氏の統治下にあった鎌倉八幡

宮の流鏑馬は、実際に射手として勤仕していない幕府の有力者が名を連ねて装束などを整え、御家人に対してその権威を誇示する行事へと変質した。従来の相伝射芸を守ろうとした三浦一族が滅ぼされた宝治の合戦（一二四七）以後、当初から義務づけられていた放生会供奉を辞退する御家人が目立つようになり、放生会の流鏑馬は衰退した。しかし、鎌倉時代末期に至るまで一応行われ、室町時代には廃絶した。

右に記した鵜田氏の論旨は、平安時代末期から室町時代にかけて、中央の祭礼において展開した流鏑馬が、為政者の権威を示す機会であったことを強調しておられる。しかし、その機会は、同時に流鏑馬が鳴鏑を使つて的を射ること、為政者たるにふさわしいか否かの神意を問う行事であったことにも注目しておきたい。そして、流鏑馬奉納の衰退とともに、鎌倉幕府が滅亡したのは象徴的である。

## 2 埼玉県毛呂山町出雲伊波比神社の流鏑馬

右のような武士による中央の流鏑馬に対して、地方に行われていた神事としての流鏑馬は、どのような様相を呈していたであろうか。次に関東の一地方において、平安時代の末期に起源を持つと伝えられている流鏑馬の歴史の変遷をたどり、現在でも神社の氏子によって伝承されている祭礼の流鏑馬について記すことで、在地武士および武士以外の庶民が流鏑馬に期待したものが何であったかを追究してみたい。

埼玉県入間郡毛呂山町岩井に鎮座の出雲伊波比神社祭礼（一月三日）には、氏子によって流鏑馬が奉納されており、この流鏑馬は昭和三三年（一九五八）に県の無形民俗文化財に指定されている。出雲伊波比神社は、中世から近世にかけて毛呂明神または飛来明神と称され、幕末に出雲伊波比神社と改称した。草創年代は不明であるが、『延喜式』神名帳の入間郡五座の中の「出雲伊波比神社」に比定する説もあるという。<sup>27</sup> 出雲伊波比神社に所蔵されている棟札によれば、大永八年（一五二七）に社殿が焼失し、その翌年（享禄元年）に毛呂顕繁によって再建されている。毛呂氏は戦

国動乱期に北条氏に属して当地に勢力を張っていた豪族であり、現在の祭礼においても毛呂氏の子孫である大谷木一族が出雲伊波比神社の儀礼に深く関わっている。<sup>(28)</sup>

土地の伝承によれば、出雲伊波比神社流鏑馬の起源は、源頼義、義家父子が前九年の役に凱旋の帰途、康平六年（一〇六三）神社境内に八幡社を建立し、流鏑馬を奉納したのに始まるという。この八幡社建立と流鏑馬起源に関する伝承は、鎌倉鶴岡八幡宮のそれと全く同じであることから推測して、鎌倉時代以後に土地の豪族毛呂氏が、その権威を示すために付加したものと考えられる。

神社所蔵の「元禄一五年（一七〇二）両社祭礼ノ節扶持米御下賜願」という記録には、流鏑馬が元禄一五年を遡ること七〇年以前から続いていたという記事があるという。したがって、江戸時代の初期から八幡社および飛来明神において流鏑馬の奉納が行われていたことになる。流鏑馬奉納は、明治以後も継承されたが、八幡社（八月一日）の奉納は明治二〇年代に中断、大正時代に春祭の流鏑馬として復活、以後も中断・復活を繰り返して、昭和五年（一九七六）以後、三年に一度三月第一日曜に奉納されるようになり、現在に至っている。また、かつての飛来明神秋祭（九月二九日）の奉納も、新暦切り替えとともに一〇月二九日になり、昭和四五年（一九七〇）に十一月三日に変更された。

現在の出雲伊波比神社祭礼は、三つの祭礼区によって運営され、各祭礼区は四〜五地区で構成されており、一地区が毎年輪番で馬を一頭づつ出す祭馬区を勤める。各祭馬区は、区内に馬宿と馬小屋を設置するが、祭礼区の中心地である毛呂本郷だけは常宿・常小屋で、この常宿が三つの祭礼区を統括する宿となる。各祭馬区は、馬を出す他に乗り子（長男で小・中学生1名）・矢取り（年配者1名）・口取り（青年10〜15名）の依頼、費用の調達、用具・祭具の準備と管理など全てに責任を持つ。

春秋の出雲伊波比神社祭礼は、三つの祭礼区を統括する氏子総代会、行事全般を支える流鏑馬保存会、神官、毛呂氏の子孫大谷木一族などによって運営されているという。

次に秋祭の次第を記してみよう。

# ◇ 準備

一〇月上旬 「口固・その準備」——埼玉県飯能市の馬主から馬を借りる約束をする。馬が来るまでに馬小屋の準備・祭具づくり・馬具点検などを行う。

一〇月下旬 「稽古初・早朝稽古」——馬を借りた日の午後から稽古を始める。翌日から早朝稽古となり、以後一〇月三十一日まで神社馬場で乗馬の稽古をする。

一〇月三十一日 「稽古じまい・お精進」——午後に稽古を終了する。乗り子はそのまま神社に一晚籠ってお祓を受け、夜中にミタラセ池に下りて体を清めて神社にかけもどることを何度も繰り返す。

十一月一日 「ノックミ」——夕方各祭馬区から三頭の馬が神社馬場に入り、本番用の装束を着けた乗り子が馬場を軽く走って一往復する（これを「ジンミチ」という）。後各々三回程素乗りをする。神社参拝後、的宿に乗り込み、以後乗り子と矢取りは的宿に宿泊する。

十二月二日 「町廻・追出の餅搗」——午後三頭の馬が乗り子を乗せ、口取り衆に付き添われて町廻りをする。コースは決まっており、的宿から越辺川の重殿淵でお祓と馬の口すすぎを行う。次に前久保地区センターで焼米（ふかした粳米と炒り大豆を混ぜた物。これを食べるとシャクが治る、産後の肥立ちがよいといわれている）の饗応を受ける。ミタラセ池で馬の口すすぎ、馬場での素乗りの後、神官の饗応を受け、的宿にもどってから毛呂川へ禊に行く。

午後一〇時から乗り子と矢取りによって「追出の餅搗」が始まり、お供え餅・力餅・半紙でおひねりにしたお石（本祭の夕的出陣に際して屋根の上から撒かれる）が準備され、深夜におよぶ。

## ◇ 本祭の流鏑馬

一月三日「朝的・その後」―午前五時鍵取を勤める大谷木氏の社参。午前九時「ジンミチ」「騎射」(矢は先の尖った藁的にささるものを使い、見物人はこれを持ち帰り、養蚕の無事を願う呪物とした)「鞭」2回。朝的を終了すると、馬場の南端で「野陣」が張られ、陣幕内で乗り子が冷酒と柿の接待を受け、的宿にもどる。

「夕的準備」―午後一時「追出の酒盛」(乗り子と矢取りの盃ごとがあり、後に湯漬けの飯を一本箸で食べる)「出陣」(乗り子は花笠に母衣を負う。母衣は敵の矢を防ぐという)「出陣の餅投」(屋根からお石を投げる。この餅は子供の夜泣きを治すという。毛呂氏が最初に居を構えた所と伝えられる榎堂を廻り、神社へ向かう)「行列」(矢取りの先導で、乗り子を乗せた祭馬側を口取りがかため、後ろからブチ棒を持った祭馬区の人々が従う。このブチ棒も矢と同様に養蚕の無事を願う呪物として持ち帰る)「馬の爪切」(神社に上る麓でカツノキで作った爪切りで、馬の爪を切る真似をする)

「夕的」―午後二時二五分から「馬見せ」(乗り子が正装で馬場を一往復する)「願的」(一の馬だけが一の的を先が重くなった矢で一回だけ射る)「ジンミチ」「矢的」(一の馬から順に三回づつ矢を射る。この時の矢は矢先平で板的を射る)「センス」「ノロシ」「蜜柑」の順に各一回。「鞭」(数回)

三頭が各々一―一三回馬場を走り、終了後神社参拝、境内で手締めをして下山する。

現行・中断併せた埼玉県下における祭礼の流鏑馬は、鎌倉時代に軍事要路として整備された鎌倉街道沿いに分布し、江戸時代の初期には地域住民によって祭礼の中心に位置づけられた。戦闘に関わる儀礼を残しながら農産物の豊稔祈願、特に養蚕農家の多い地域の信仰と結びついて伝承されてきた場合が多い。さらに、子供の育成に関わる信仰が加えられ、この地域独自の祭礼形式と流鏑馬を残している。

既に明らかなように、出雲伊波比神社の流鏑馬は射手が少年であり、所要所で養蚕の順調と子共の育成を祈願する行事、および戦闘に関わる行事が見られる。馬場では少年の乗り子が、様々な装束で矢を射る他に両手で開き扇をかざし、さらに口に開き扇をくわえて駆け抜ける「センス」、以下「ノロシ」「ムチ」「ミカン」など、流鏑馬本来の意義ではない余興的な演技が加えられている。出雲伊波比神社の流鏑馬が、近世初期から射手を少年が勤めていたか否か、また多くの民俗的行事や余興的な演技が行われていたか否かについては不明である。しかし、中世末期から近世初期における農村の祭礼に、稚児流鏑馬を奉納した例は比較的多かったようであり、それは武士階級が深く関わった祭の形式を残しつつ流鏑馬を伝承するための手段であったと考えることができる。

#### 四 狂言「児流鏑馬」の台本に見る祭祀組織と流鏑馬

近世農村の祭礼における稚児流鏑馬奉納について手がかりを与えてくれるのが、狂言「児流鏑馬」の台本である。古台本の天理本『狂言六義』<sup>(29)</sup>、および和泉家古本『六義』<sup>(30)</sup>の中に収められている「児流鏑馬」の内容から、近世初期における地方共同体の祭礼の中心行事としての、稚児流鏑馬の存在を確認することができる。

次に天理本『狂言六義』によって、「児流鏑馬」の内容を記してみよう。天理本『狂言六義』の成立年代は、正保三年（一六四六）以前とされる。

所の神社祭礼に頭人となったシテは、馬や弓矢など流鏑馬に使用する道具の準備を整えたが、肝心の射手を勤める稚児を見つけられないまま、祭礼の当日を迎えてしまふ。舞台に登場したシテが、女房を呼び出して相談を持ちかけるところから、この狂言「児流鏑馬」は始まっている。稚児を見つけれなかったことをめぐって夫婦喧嘩となり、シテ「隣郷まで尋ても、ない物せう様があらふか」。女「苦々しい事かな、神の罰も当たらず、その上、在所にそなたを、



人が置かふと思わしますか（以下略）」などの台詞があつて、シテは、女房に稚児役を演じてくれるよう頼みこむ。拒む女房に、シテ「（略）花笠を深々と着せて、女と見へぬやうにして出さう」などと説得する。最後に女房は、「（略）あの乳飲み子は、何とせうぞ」と抵抗してみるが、結局自分で懐に入れて射手を勤めるといふシテの解決策で中入りする。

立衆の頭、太郎冠者、立衆多勢が舞台に登場し、シテと稚児に扮した女房を乗せた馬、馬の口取などが舞台に登場する。児流鎗馬の行列は舞台を一周して、女房扮する稚児が的を射る。立衆「当たつたく、（略）いつものごとく、お兄に、拝殿にて、神酒を参らせう」。シテ「いや、御無用じゃ」と、押し問答の末、立衆が兄を馬から引き下ろし、花笠をぬがせ、兄の正体を現してまう。女房は懐から乳飲み子を出して夫婦で逃げ入り、立衆が追い込む。

右に示した台本の内容から、近世初期農村における祭祀組織の輪郭が見えてくる。頭人は、年番で勤めていること、稚児・馬・弓矢・的などを準備したこと、村の中で稚児が見つからない場合は他村から雇うことができたことなどがわかる。また、祭の渡し物は、稚児の流鎗馬が中核をなしている。立衆の頭は太郎冠者（召使）を雇っている身分であることから、年番の頭人より身分的に上位であり、武士化していない名主のような存在であつたと想像することができ。武士階級の存在しない農村の祭祀における流鎗馬は、花笠を被った稚児の射手が奉納することで、武芸とは無関係に五穀豊穡や疫病避けなどを祈願する、庶民の祭祀儀礼であることを強調した結果といえよう。

天理本『狂言六義』の「千鳥」<sup>(3)</sup>にも、シテである太郎冠者の次のような台詞がある。「流鎗馬の渡るに、射手の兄を、馬に乗せて、弓矢を持たせて、的を射さするが、面白い」この台詞は、主人の命令で代物を持たずに祭り用の酒を持ち帰りたい太郎冠者が、酒屋に祭りの様子を仕方話で演じて見せる場面のものである。

このような古本狂言台本の存在によって、出雲伊波比神社の流鎗馬も江戸時代の初期から稚児流鎗馬であつた可能性は大きい。

## おわりに

『記紀』に記された弓矢の諸相から、奈良時代の人々が鳴弦や鳴鏑の音響に呪力を感じていたことは明らかであり、時代が下るとともにその呪力はいっそう範囲を拡大した。

特に、鳴鏑を用いて行われた流鏑馬は、平安時代末期から高度な技術を要する騎射であり、貴族の遊興として行われる一方、その呪術性ゆえに在地の武士階級によっても早くから神事として行われていた。やがて、時代の変遷とともに、為政者によって中央の祭祀に位置づけられる形で、武士社会の政治的な道具として利用された。したがって、鉄砲伝来以前の武士階級にとって、その技術の優劣は武士としての勢力の有無を世に示すことにつながり、その形式や目的は、時代とともに変容した。それは、先に記した院政期の鳥羽城南寺祭・新日吉小五月会・宇治離宮祭や鎌倉時代の鶴岡八幡宮放生会など、中央の祭祀に位置づけられた流鏑馬ばかりではない。

福原敏男氏によれば、春日若宮御祭創始の保延二年（一一三六）から在地の大和武士団によって奉仕されてきた流鏑馬も、南北朝期において散在党・長谷川党・長川党・乾脇党・南党、後に平田党が成立し、ローテーションを決めて年番で願主人を勤めるようになり、祭祀を主導したという。福原氏はこの件について永島福太郎氏の論文を引用して、次のように記している。「当代に衆徒・国民を構成員とする大和武士の六党（後八党）が形成された。それぞれの党的結合の紐帯は若宮祭にあった。いわば若宮祭に大和武士の宮座六つが形成されたことになる<sup>(32)</sup>」。このような春日若宮御祭に見る大和武士団の流鏑馬勤仕の変遷も、平安時代末期に中央大社の祭祀に位置づけられた流鏑馬を、南北朝期になって大和武士団が勢力誇示を目的として利用した、歴史的変遷として捉えることができるのである。

鉄砲が普及した後にも、狂言「児流鏑馬」に見るようなスタイルで長閑に奉納されていた農村の流鏑馬は、戦国時代

を迎えることで庶民的であった頭取クラス名主の武士化により、勢力誇示の道具というよりは戦勝祈願の目的で、例祭とは別の臨時祭として行われた可能性もある。

現行の出雲伊波比神社の流鏑馬に見るような、繭の豊作や子供の育成祈願などに関わる様々な民俗や余興的な射芸などは、繰り返された戦乱の世の合間に行われるようになった庶民信仰の積み重ねで、庶民による祭礼に位置づけられた流鏑馬が徐々に獲得したものであろう。

この度の執筆に際し、早稲田大学演劇博物館の渡辺伸夫氏、毛呂山町歴史民俗資料館の寺島正芳氏に資料提供をしていただいた。また仁尾洋子氏には表作成をお願いした。記してお礼申し上げる。

## 注

- (1) 中村茂子「武器と芸能へその一」採り物の「ほこ」と祭礼に出る「ほこ」——『芸能の科学』22 東京国立文化財研究所 芸能部編 一九九四年 一〇三頁。
- (2) 『古事記 祝詞』(倉野憲司・武田祐吉校注『日本古典文学大系』1 一九七九年 岩波書店) 七五頁。
- (3) 『日本書紀』上(坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系』67 一九七九年 岩波書店) 一〇四頁。
- (4) 小笠原持長著『大的体拝記』(『古事類苑』武技部〈古事類苑刊行会 一九三二年〉二〇五頁。  
小笠原持長(一三九六—一四六二)は弓馬の名人で武家故実の大家。他に『犬追物集書』『射礼私記』などの著書多数がある。
- (5) 注(3)に同じ。五〇〇頁。
- (6) 『日本書紀』下(坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系』68 一九七九年 岩波書店) 一三三頁。
- (7) 注(2)に同じ。九七頁。
- (8) 注(2)に同じ。一五五頁。
- (9) 注(2)に同じ。一一頁。
- (10) 注(6)に同じ。三〇〇頁。四二二頁。四六〇頁。四九八頁。四九九頁。

- (11) 『続日本紀』前篇 卷第三（黒板勝美・国史大系編集会編『新訂増補国史大系』一九七九年 吉川弘文館）二四頁。
- (12) 注(6)に同じ。二二九頁。
- (13) 注(3)に同じ。五〇〇頁。
- (14) 注(6)に同じ。二二二頁。
- (15) 『権記一・師記』（増補史料大成刊行会編『増補史料大成』一九七五年再版 臨川書店）一〇二・一〇三頁。
- (16) 『山槐記』三（増補史料大成刊行会編『増補史料大成』一九七五年再版 臨川書店）二二頁。
- (17) 『武器考証』第二（故実叢書編集部編『新訂増補故実叢書』一九五二年 明治図書出版）四六〇頁。
- (18) 『延喜式』後篇（黒板勝美・国史大系編集会編『新訂増補国史大系』一九七九年 吉川弘文館）九五五頁。
- 卷四五 左右近衛府 雷降「凡大雷時。左右近衛陣御在所。又左右兵衛直參入陣紫宸殿前。内舍人立春興殿西廂。不必待聞司奏。」
- (19) 『平家物語』上（高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一晴彦校注『日本古典文学大系』32 一九七九年 岩波書店）三二五頁。
- 卷第四鵄「堀河天皇御在位の時、しかのごとく主上よなくおびへさせ給ふ事ありけり。其時の將軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御惱の起限に及で、鳴弦する事三度の後、高声に『前陸奥守源義家』と名のったりければ、人々皆身の毛よだって、御惱おこたらせ給ひけり」。
- (20) 『今昔物語集』四（山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注『日本古典文学大系』25 一九七九年 岩波書店）三八一頁。
- 卷第二十五の第六「春宮、御宮トヒキメトヲ給ヒテ『彼ノ辰巳ノ檐ニ有ル狐ヲ射ヨ』ト仰セ給ケレバ」
- (21) 『北野天神縁起』（源豊宗編『新修 日本絵巻全集』第9巻 一九七七年 角川書店）八五頁。
- (22) 『中右記』一（増補史料大成刊行会編『増補史料大成』一九七五年再版 臨川書店）三五一頁。
- (23) 注(22)に同じ。三五一・三五二頁。
- (24) 鶴田泉「流鏑馬行事の成立」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』Vol.40 一九八七年）一・二二〇頁。
- (25) 福原敏男『「若宮会目録」・「長川流鏑馬日記」の紹介と解題—春日若宮祭礼流鏑馬頭役勤仕史料—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集 同館編・発行 一九九〇年）七五・七六頁。

- (26) 鶴田泉「流鏑馬行事と鎌倉武士団」(『芸能史研究』第九十九号 一九八七年 芸能史研究会) 一〇三頁。
- (27) 『日本歴史地名大系』第11巻 埼玉県の地名(平凡社地方資料センター編 一九九三年 平凡社) 三四四頁。
- 「入間郡毛呂山町出雲伊波比神社」
- (28) 「第1回特別展『毛呂の流鏑馬』」(毛呂山町歴史民俗資料館編・発行 一九九三年)
- 毛呂の流鏑馬に関する記載は、すべてこの資料によった。
- (29) 北原保雄・小林賢次著『狂言六義全注』(一九九一年 勉誠社) 六五〇～六五二頁。
- (30) 池田廣司校注・解題「和泉家古本『六議』」(『日本庶民文化史料集成』第四巻 狂言 芸能史研究会編 一九七五年 三一書房) 一一二～一一四頁。
- (31) 注(29)に同じ。六七九～六八四頁。
- (32) 注(25)に同じ。七四～七五頁。

## 付記

萩原法子氏の「弓神事の原初的意味をさぐる―三本足の鳥の的を中心に―」(『日本民俗学』一九三号)は納得できる点の多い論文である。オビシャは日射であり、この行事を含めた正月の弓神事は太陽の活性化をはかり、村の時間と秩序の更進を目的としたもので、年占の要素はそこから派生したものであるという。しかし、村々に行われているヤブサメは内容的にもオビシャとの違いがないという点には異論がある。筆者は騎射でないヤブサメの奉納には次の二通りの理由があると考える。

一、かつて流鏑馬であった奉納が何かの理由で不可能になった。

二、騎射でない弓射神事に対して、ヤブサメという名称が流用された。

但し、正月に行われている農村の流鏑馬(走り馬)の中には信仰的な面でオビシャに近いものがあることは確かであろう。